

— 資 料 —

保育者志望学生の「今できる子育て支援とは何か」に関する一考察
— 家庭訪問型の子育て支援活動を通して —

塚 田 みちる

A Study of Child-Nurturing Support Program by Child-Young Trainees'
Readiness for Child Rearing Support

Michiru TSUKADA

要 旨

本資料は保育者志望学生の「今できる子育て支援」という観点から、家庭訪問型の子育て支援活動の内容を報告したものである。活動は筆者の子育て支援活動の一環として2016年度から開始された。初年度の活動報告を通して、保育学生に求められる支援のあり方を模索した。活動への参加学生は2016年度に本学幼児教育学科在籍した15名。二人1組で大学近隣の子育て家庭を継続的に訪問した。その報告レポートによれば、母親の育児を支援するために、学生が子どもを遊びに誘い込むことで、家庭内「母子分離」の空間と時間を提供していることが分かった。また、生活面での介助や母親の話し相手になるという点でも母親の役に立てたと感じ、達成感ややりがいを抱く様子も報告された。しかしながら、事前に母親のニーズを十分に把握しておらず支援のマッチングが課題として残された。これらを踏まえて「支援する—される」という関係の成り立ちに向けて今後の展開の可能性が示された。

キーワード：家庭内母子分離 子育て支援 親子 保育学生 家庭訪問型

はじめに

幼稚園教員免許・保育士資格を取得するための養成校に在学する短期大学生（以降、保育学生と記述）は、家庭訪問型の子育て支援活動を在学中に経験することで、何を学ぶことができるのだろうか。保育学生は幼稚園や保育園での学外実習において、園での集団生活を体験する子どもと間近に触れ合うことができる。また、朝夕の送迎時には保護者の姿や、そこでの親子の関わりを目にする機会があるだろう。しかしながら、家庭養育という場での親子の姿を見る機会はほとんどないといってよい。子どもの健やかな育ちを支える日々の生活の中心は家庭生活にあり、子どもにとって家庭養育という場の重要性は言うまでもない。平成29年3月31日告示の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領¹⁾のいずれにおいても、乳幼児の生活は家庭を基盤として地域社会を通じて次第に広がりを持つものであることの大切さが言及されている。こうした経験をすることは、将来、保育者になったときに保護者の子育てを支援するという支援者としての役割意識に貢献すると思われる。

筆者は親子関係の発達を専門に研究する一方で、保護者の子育て相談に応じる経験から「支

援する－される＞という関係の成り立ちに興味を抱くようになった。この関係は実に複雑で、支援する側とされる側のどちらかが「する」側で「される」側にとどまらないものである。決して一方的な関係ではないとはいえ、保育学生から見たら保護者は自分たちより年輩で、人生経験も豊富で、すでに子育てに従事しており「人生の達人」のように見えるに違いない。したがって保護者の子育て支援に応じるということに、気が引けたり戸惑いを抱いたとしても不思議ではない。では、保育学生に求められる子育て支援とは何か。この疑問にチャレンジするために家庭訪問型の支援活動「ママさん先生プロジェクト」を2016年度から実施した。「ママさん先生」と表現したのは、保護者が支援される立場でありながら、将来の保育者を育てるための「支援者」でもあるという位置づけを明確にするためである。すなわち、相互に支援し合うという関係をつくるための試みといえよう。ただし本稿は、保育学生の目から見た支援のあり方に限定された報告のため研究資料とした。これら資料の積み重ねにより、今後は、保護者、子ども、保育学生の三者関係、そしてこれら三者関係の支援者としての筆者を含めたダイナミックな関係のありようを捉えていくこととする。

問題意識

(1) 家庭訪問による母子の関わりを観察

保育学生が家庭訪問型の子育て支援活動を行うということのそもそもの発案は、筆者自身が長年、発達心理学的観点から親子の関わりを観察研究を「家庭訪問」というかたちで行ってきたことによる。乳幼児期の親子関係に興味を抱き、親が子どもを育てるといったことなのかについて考えていくために、母子の関わり合いの場面の観察を始めた。その時、日常的な母子の関わりにできるだけ接近できるように、家庭訪問による縦断観察という方法をとった。このようなかたちで研究資料を積み重ねていく中で感動したことがある。それは「母親が子どもを小さいながらも一個の主体として尊重して関わっている」ということであった。これはいったん気づいてみれば当たり前のことであるが、その姿に間近で出会った時の感動は今でも鮮明に記憶している。そして、このような感動を、保育者を目指す学生にも体験して欲しいという願いからの発案であった。なぜなら、こうした感動を体験したことから親子に深く心を寄せ、子どもの育ちを母親とともに喜び、子育てがうまくいかない時は共に悩み、そして母子にとって身近な第三者として子育ての役に立ちたいという思いを強くしたからである。

幼いわが子を一個の主体として尊重して関わるといことは、どんなときにもその子にはその子なりの思いがあると受け止めるということである。母親は、子どもの思いをいつでも受け止めてあげたいと願う一方で、「そういう振る舞いをして欲しくない」と思うなど子どもの思いを受け入れられない時もある。これら2つの矛盾した気持ちを抱くところに子育てが一筋縄にはいかない難しさがある。しかしそれでも我が子のその子なりを大事にして関わろうとすることが、子どもの心の育ちに欠かせないと指摘されている^{2),3)}。だが同時に、子育ての難しさゆえに母親への支援が必要であることは想像に難くない。母子を取り巻く現代の社会状況に目を転じれば、少子化問題や児童虐待の増加、母親の孤立化など子育ての難しさを浮き彫りにするような状況が目につく。こうした緊急課題に目を向ける時、我々の一人一人が他人の子育て

を「他人事」ではなく、自ら育児の現場に出向いて心を寄せて関わろうとする意識が不可欠といえるだろう。そういう意識は保育者になってから抱くものではなく、保育学生のうちから育むことが必要ではないだろうか。そこに本プロジェクトの価値があると考えるに至った。

(2) 子育て支援を提供する若い世代の問題

子育ては家族の責任だけでなされるものではなく、社会全体で子育て家庭を支援しようという社会的な動きがある。2000年の文部科学省中央教育審議会答申⁴⁾「少子化と教育について」によれば、「子どもは社会の宝」であり、「社会全体で子どもを育てていく」ことが大切であるという考え方が指摘され久しい。川瀬⁵⁾は、現代社会の子育ての問題点として、育児経験がほとんどないまま母親になる人が増えたこと、子育ての仲間が全くいない「孤立した母親」が増えたことを挙げている。これらに対して社会全体での子育て支援を考える時、若い世代の親準備教育を展開することが重要であるという。若い世代における親準備教育とは、これから親になる若い世代（たとえば大学生）に子どもや子育てについての知識や技術を提供することとある。そして、その提供の方法として、育児の現場、すなわち家庭に触れることによって子どもや子育てについての知識や実践的な技術を身に付けることができるとして子育て家庭を訪問するという取り組みがなされている。その取り組みの結果、子育て家庭を訪問した参加学生は子どもの世話に自信が付き、自分が親になることをイメージできるようになり、地域での子育て支援活動に関心を持つようになっていたという。受け入れ家庭の母親たちは学生の家庭訪問が子育てのサポートになり、子どもに家族以外の人と接する機会を与えることができ、母親自身も家族以外の人と話す機会を得て、人間関係が広がっていたことが報告されている⁵⁾。別の研究⁶⁾でも、子育て家庭での親子との触れ合い体験が大学生の親準備性にもたらす効果が検討されている。親準備性の指標は「赤ちゃんに対する興味や関心」、「子どもの世話に対する自信や興味」、「将来、親になることへの具体的かつ肯定的イメージ」の3項目であり、いずれも訪問の継続により3項目の得点が向上していることを明らかにした。体験した学生の報告を分析した結果によれば、子どもの成長ぶりや子どもとの関係の深まりへの言及が多数みられた一方で、子どもをあやせず困惑した、母親の助けになれず不甲斐なかったなどの記述も見られた。生活に根差した体験が子育て生活の正負両面への気づきを促し、それが親準備性の向上につながったと考察されている。

これらの研究成果を見ると、小さい子どもとの触れ合い体験不足が、次世代の子育てを担う若者に子育ての営みを準備するという構えを育ちにくくさせていると言える。子どもと関わる経験が増加することで、その楽しさや喜びを感じ、その一方で、子育てには大人の思い通りにならないという負の側面があることを知るようになるといえる。しかしながら、これまでの研究では、母親が抱く子育ての負の側面を軽減するために学生がいかに工夫するかに踏み込んで母子に関わるという傾向はみだされていない。おそらく先に挙げた研究⁵⁾・⁶⁾では、この活動への参加学生が保育学生ではないことと関係していると思われる。その点、保育学生は、小さい子どもとの関わりに対して幼稚園・保育園でのボランティアや学外実習体験に裏打ちされた自負があるだろう。そのため訪問家庭の子どもとの年齢に合わせた遊びを提供するなど、子ども

の年齢にあった対応ができると思われる。これまでの経験を踏まえて、どのようなところで母親の役に立つことができるかを学生自身が試行錯誤するところに、保育者への準備教育としての意義があるのではないか。そこで、保育学生を対象に家庭訪問型の活動を展開し、その報告レポートをもとに保育学生の子育て支援の特徴を明らかにする。結論を先んじて述べると、保育学生は母親の育児の手伝いとして、子どもが学生と夢中になって遊ぶように仕向けることで、家庭内で「母子分離」をするための空間と時間をつくるように意識している様子が見受けられた。

家庭訪問型子育て支援活動の手続き

(1) 家庭訪問型子育て支援活動「ママさん先生プロジェクト」の概要

① プロジェクトの目的

2つの目的を設定した。1つめは、乳幼児のいる家庭を継続的に訪問して子育て家庭の生活の実際を体験することである。子どもの世話や遊び、外出の体験（親の付き添いのもと）などを通して、子どもの様子や成長していく姿、子どもを育てる親の様子に触れることである。2つめは、未来の保育者として子どもの育ちについてこれまでに学んだ知識と実習体験を家庭での育児に役立てることとした。

② 訪問学生

2016年度に本学幼児教育学科に在籍した2年次生15名。筆者のゼミの履修者である。訪問学生全員が幼稚園教員2種免許ならびに保育士資格取得を希望していた。保育に関する基本的な知識は、免許ならびに資格取得に必要な科目にて学修している。さらに保育所での実習（計4週間程度）、教育実習（約3週間）、保育所以外での児童福祉施設での実習（約2週間）を経験済みであった。その他、保育園等でのボランティアも多数経験済みであった。

参加学生はゼミ活動の一つとしてプロジェクトに参加したが、できるだけ主体的に参加するというかたちをとるため参加希望の有無を活動前に尋ねた。希望しない場合には別の子育て支援活動に参加できること、参加を希望しない場合でも成績評価には一切不利益がないことを説明した。

③ 活動の流れ

プロジェクト活動は2016年7月から2017年1月にかけて実施された。受け入れ家庭募集の際、母親には未来の保育者育成への協力を依頼し、幼稚園や保育園での実習先では経験できない家庭養育の実際を学生に教えて欲しい旨を伝えた。

2016年度、プロジェクトの活動概要は以下の通りである。

- #1. (2016年7月、8月) 親子遊びの広場^{注1)}にてプロジェクトの案内と受け入れ家庭の募集
- #2. (2016年9月) 学生への事前指導（活動の目的、訪問する際の諸注意、担当家庭とのマッチングなどを1時間半程度）
- #3. (2016年10月) 受け入れ家庭との顔合わせ^{注2)}（受け入れ家庭の親子には当該日に開催されている親子遊びの広場に参加後、顔合わせを行った。1時間半程度子どもと遊び、その後、保護者との日程調整など30分程度実施した）

- #4. (2016年10月から2017年1月末) 家庭訪問期間 (複数回訪問)
- #5. (2016年10月) 経過報告 (ゼミ生全員での意見交換)
- #6. (2016年11月) 経過報告 (ゼミ生全員での意見交換)
- #7. (2016年12月) 経過報告 (ゼミ生全員での意見交換)
- #8. (2017年1月末) 「お礼の会」受け入れ家庭の親子を招待しての集いの会。

受け入れ家庭を募集した後、家庭に対してオリエンテーションを行い、学生に対しては事前指導を行った (#1, 2参照)。訪問学生 (2人1組) と家庭のマッチングを行い家庭訪問が開始された (#3, 4)。家庭訪問期間中には、訪問学生を対象に、定期的に (月に1回程度) の経過報告会を開催し、筆者が学生の活動内容を把握するとともに学生同士の意見交換を行った (#5~7)。最後に「お礼の会」と称し、受け入れ家庭の親子を学内に招き、最終報告会として全体で意見交換を行った (#8)。

④ 受け入れ家庭

大学近隣の神戸市在住の9家庭であった。受け入れ家庭の子どもの年齢は1歳0か月~6歳3か月であった。きょうだいのいる家庭は2家庭であった。

⑤ 家庭訪問

訪問は、受け入れ家庭の都合を優先して学生と母親とで日程調整を行った。2016年10月から2017年1月末までの期間に、原則として4時間訪問するように指示した。ただし、状況に応じて2時間の追加訪問を認めた。追加するかどうかは受け入れ家庭と学生との話し合いで決めることとした。なお、万が一の事故に備え、学生は全員ボランティア保険に加入している。

(2) 活動の記録

先述の活動概要 (#1~8) に示したように、プロジェクトの流れは次の5つのステップに沿って進む。それは1) 学生への事前指導, 2) 受け入れ家庭との顔合わせ, 3) 家庭訪問, 4) 経過報告, 5) お礼の会である。記録は以下のとおりである。

1) と2) を踏まえて、「訪問計画表」を作成。

3) では、毎回の訪問のたびに訪問記録。この記録は、その日の活動内容、母親の手助けになったところ、反省点の3項目で構成した。

4) では活動の様子や学びの内容などを振り返った。このときの振り返りの内容は筆者が記録した。訪問回数の合計は9家庭合計で24回、計48時間であった。

5) として、すべての訪問終了後、今回の家庭訪問での学びを事後レポートとした。

(3) 分析

訪問記録は、訪問総数24回のうち1回分提出されなかったため23回分、事後レポート15名分を分析対象とした。学期終了後、研究資料としての使用の了解を得た。

結果と考察

(1) 家庭訪問の基礎データ

基礎データとして受け入れ家庭ならびに訪問学生についての資料を提示する (表1参照)。9家庭への訪問回数と時間数は各家庭の事情によりばらつきがあったが、訪問学生9ペア中7

表1 受け入れ家庭ならびに訪問学生について

受け入れ家庭	対象児	子どもの年齢	子どもの性別	訪問学生	訪問回数	訪問時間 (合計)
1	Ko 児	1歳0か月	男児	A, B	3	6h
2	Ta 児	1歳5か月	男児	C, D	2	6h
3	Mi 児	2歳0か月	女児	A, D	1	2h
4	Mo 児	5歳5か月	女児	E, F	3	6h
	Si 児	2歳2か月	男児			
5	Ks 児	2歳6か月	女児	G, H	3	6h
6	Kr 児	3歳4か月	女児	I, J	4	6h
7	Sa 児	3歳6か月	女児	K, L	2	4h
8	At 児	6歳3か月	女児	B, M	3	6h
	Iz 児	2歳5か月	男児			
9	Ry 児	3歳11か月	男児	N, O	3	6h

注1) きょうだいのいる家庭は2家庭(4と8)である。

ペアから追加訪問の希望が出され、最大で6時間になったところがあった。自主的に追加訪問を希望したことから主体的に取り組んだことがうかがわれた。なお、表1中、受け入れ家庭3は、母親が第2子出産を目前に控えていたこともあって母親の希望で2時間の訪問で打ち切りとなった。

(2) 訪問記録の分析

訪問記録は、1) その日の活動内容、2) 母親の手助けになったところ、3) 反省点の3項目で構成された。これらの記述内容について分析を行った。

1) その日の活動内容の報告から

記述された手伝いの内容を、子どもの年齢別に表2に示した。母親の育児の手伝いは、外遊び、室内遊び、生活の3種類に分類された。

外遊びと室内遊びを年齢ごとに見てみると、1歳代は、音のなる玩具、手遊び、ジャングルジムなど室内での運動遊具を使った遊び、五感を刺激する感覚遊び、身体を動かす運動遊びが主であった。年齢が上がると、ブロックやプラレールなどの構成遊び、ごっこ遊びといった象徴遊びが見られ、イメージを膨らませる遊びが取り入れられていた。また、外でおいかけっこをするなど体を動かす運動遊びも見られた。これらの遊びの種類は、概ね、年齢に沿った遊びの内容であると言えるだろう。学生には、それぞれの家庭で子どもの年齢にふさわしい遊びができるような物理的環境を、親が整えていることを知る機会となったと思われる。

2) 母親の手助けになったところと反省点の報告から

では、上に述べたような環境で子どもと遊ぶことについて学生は支援者としてどのような意識で臨んでいたのだろうか。それは1) 家庭内での母子分離の実現、2) 生活面での介助3) 母親の話し相手の3つに分類された。

表2 子どもの年齢別の手伝いの内容

年齢	1歳頃 ^{A)}	1歳半頃 ^{B)}	2歳頃 ^{C)}	2歳半頃 ^{D)}	3歳半頃 ^{E)}	4歳少し前 ^{F)}
外遊び			砂遊び		ボール遊び	虫さがし
			滑り台		しゃぼん玉	草相撲
			おいかけっこ		散歩	公園の遊具
			はないちもんめ		砂遊び	
			かくれんぼ		どんぐり拾い	
					鬼ごっこ	
室内遊び	車の玩具	絵本	ままごと	塗り絵	ままごと	紙粘土
	手遊び	音のなる玩具	パズル	パズル	プラレール	絵本
	絵本		ごっこ遊び	ごっこ遊び		パズル
	音のなる玩具		絵本	ままごと		プラレール
	ジャングルジム		プラレール	ごっこ遊び		
	滑り台 ブランコ		ブロック			
生活	食事の介助	食事の介助	おやつ介助	手洗い介助	おやつ介助	稽古事同行
	おやつ介助	おやつ介助		おやつ介助		幼稚園お迎え
	母親と歓談	母親と歓談		排泄介助		買い物同行
				玩具の片付け		季節の遊び

A) Ko 児, B) Ta 児, C) Mi 児, Si 児, D) Ks 児, E) Kr 児, Sa 児, F) Iz 児, Ry 児

1) 家庭内での母子分離の実現

家庭内での母子分離の実現では、ただ単に自分たち学生を子どもの遊び相手と捉えるというより、自分たちが子どもと楽しく遊ぶことで、母親が子どもから手を放して少しでも家事ができるように意識している様子がうかがわれた。たとえば、学生の記述に次のようなものがあった。

「お母さんの姿が見えなくなった時に子どもが寂しくならないよう、興味がもてそうな遊びに誘った。お母さんの姿が見えなくて子どもが不安になり泣いてしまうことがあったので、お母さんの姿が見える位置で遊ぶよう気をつけた」(学生 B)

「お母さんが家事をしている間、子どもがぐずらないように絵本を読んでいた」(学生 B, C, D, E, F, K, L)

「Ry くと遊んでいる時、お母さんがゆっくりと一人の時間を過ごすことができて助かりましたと言っていました」(学生 N)

「私たちが子どもと遊んでいる間、掃除や家事をするのもいいけれど、何もせずに息抜きできるのが本当に嬉しいとおっしゃっておられた」(学生 K)

「Si くんがお母さんから離れず、最初は大丈夫かなあと思ったのですが、おもちゃで気を引いてそこから私たち二人に慣れてくれて Si くんも安心して楽しく遊べていたので良かったし、お母さんも Si くんが楽しそうにしているのを見てほっこりしていて、家事もゆっくりされていたので満足そうでした」(学生 F)

「2 回目の訪問で前回よりも Sa ちゃんと関わることができました。公園では遊具が少なく何をして遊ぶのか悩んでいる Sa ちゃんに『一緒に砂場で泥団子をつくろうか』と声をかけると夢中になって遊んでいました。落ち葉を使った遊びも一緒にすることができて楽しかったです。また、お母さんが晩御飯の支度をしている時も遊びに熱中している様子だったので、前回は Sa ちゃんがすぐにお母さんのところに行き縫物をしている時に危ないと思っても興味を引く声かけができなかった反省を活かすことができました」(学生 L)

このように家庭内外で学生との遊びに子どもが楽しんでくれることで、母親が子どもから目を放したり手がはなれたりすることを母親の手助けになるという意識を抱いていることが見受けられた。その逆に、子どもが遊びに飽きないように遊びを展開させることができなかったことを、反省点として浮かび上がらせていた(学生 A,B,D,F,I,K,N,O)。安全配慮についての不十分さや、子どもの振る舞いを「そういうことはダメよ」などと注意の声かけができなかったなども反省点に挙げられていた。

2) 生活面での介助

母親の手助けとしてもう 1 つ特徴的なことは生活習慣に結びつく活動での援助である。食事の介助や見守り、手洗いや排せつの声かけ、外出先への同行などであった。これらは母親が日頃の子育てでしていることを代わりにすることで母親の手助けになる行為であり、ここでも子どもの世話から母親の手がはなれるように配慮している様子をうかがうことができる。この生活面の支援では実習の経験を活かしたという記述があった。たとえば以下のような記述である。

「食事の時に、保育園などではどういうふうに行っているのかという質問をお母さんから受け、『大人(先生が)が介助するためのスプーンを 1 つ、お子さんが食べるようにスプーンを 1 つ持って食事をしていましたよ』と今までの実習で経験してきたことをお話しすると、お母さんがその場で実践してみようと Ko くんにはフォークを持たせ、私たちがフォークの上にご飯を置いて Ko くんへ渡すと、その日初めてフォークを使って Ko くんが自分で口まで運び食事をすることができました」(学生 A)

このとき同行した学生 B は「Ko くんがフォークで上手にご飯を食べ、お母さんが拍手をし

ながら喜んで褒めてくれることに Ko くんが喜びを感じているような様子が見られました。そんな場面に立ち会えたことにすごく感動したし、自分たちの提案が結果としてよく表れたことに喜びを感じすごく印象に残りました」と述べている。実習中の経験を活かし、それをお母さんが喜んでくれたところに喜びを感じている。Ko くんはちょうど1歳になった時で、お母さんはお子さんのできることが1つずつ増えていくことに日々喜びを感じているに違いない。子どもの成長をお母さんと共に喜ぶことができる時、子どもの育ちを支援する保育者としての喜びややりがいを感じるのではないだろうか。この点については「事後レポートの分析」で再度取り上げる。

3) 母親の話し相手

家庭訪問の最中に母親と気軽に話をすることも手助けになるようであった。

「お母さんとたくさんお話することができ、普段の Ta くんの様子などを聞くことができ、お母さんにとってはいい話し相手になってたらいいなと思いました」(学生 D)

「お母さんとたくさん話をできたところがよかったなと思いました。トイレでうちができないことを心配されていたので『これまで実習に行ったところでオムツの子もいましたよ』や『トレーニングを重ねてできるようになるといいですね』などと話をすると、お母さんが少し安心されているように思いました」(学生 F)

振り返りの時にも話が出たことであるが、「トイレのトレーニングで困っている」や「(言葉の)発音がはっきりしなくて大丈夫かなあと思っている」、「一人っ子なので家ではお父さん、お母さんといつも同じような遊びになってしまい遊びがマンネリ化してしまう」など、日頃の子育てで感じているちょっとした困りごとを、ふと「つぶやく」ことがあった。子育て相談というほど大きなものではないのかもしれないが、でも誰かに聞いて欲しい、聞いてみたいというところだろうか。その点で気軽な話し相手になれたところに、学生は母親への手助けとしての手ごたえを感じていた。

(3) 事後レポートの分析

ここまでのところで、子育て家庭を訪問中、子どもの遊び相手になることで母親にホッとする時間を提供したり、実習経験を活かして生活面での介助をしたりすることで育児の助けになっていることが分かった。また、母親と気さくに話す中で、日頃のちょっとした困りごとが話題になり日々の子育ての苦労を慮る機会になっていることもうかがえた。その一方、これらの役立った点が同時に反省点になることも分かった。もっと母親の期待に応えたかったという思いを強くする経験であったと推察できる。そこで次に、事後レポートの「今回の家庭訪問での学び」を見てみる。

ここでもう一度本活動の目的を簡単に述べると、幼稚園や保育園での実習では体験できない子育て家庭の実際を体験し、自分たちのこれまでの経験や学んだ知識を家庭での育児に役立て

ることであった。この点について事後レポートの学生の記述を見ると、①子どもにとっての家庭環境の役割、②実習経験の意義、③母親の愛情の深さと子育ての大変さについて考えることができたことが学びであった。以下に①～③に関する学生の記述を示す。

① 子どもにとっての家庭環境の重要性

子どもにとって安心感を抱ける環境の大切さを再任したという内容であった。

「今までは、実習で園にしか行ったことがなく、家庭での様子というのを見たことはなかったので、こうして家庭訪問をすることで家庭での生活の仕方、食事などいろいろなことを間近に見ることができ勉強になりました。子どもはお母さんがそばにいて、自分の玩具のスペースがあってとりリラックスして過ごしていたので、家庭は子どもにとって大切な場所であることをあらためて確認しました」(学生 A)

「今回の家庭訪問で一番学べたことは、環境がいかに子どもの心情に影響を及ぼすかということでした。『家庭』は本当に子どもが一番のびのびと落ち着いて過ごせる環境だと家での Ryくんを見ていて思いました」(学生 N)

「今回の家庭訪問で、家庭での安心したりリラックスした表情で遊ぶ姿を見ることができて、やはり安心できるような空間や環境をつくるのが大切だと学びました。これから自分が保育者として子どもに接するようになるけれど、環境構成をしっかり考えられるように頑張りたいと思いました」(学生 O)

「子どもがいる家庭の環境を見たことがあまりなく、幼い時の記憶もあまりないので、今回、家庭にお邪魔させていただいて、絵本の多さやキッチンから子どもが遊ぶ様子がよく見える位置に遊ぶスペースをとるなどの工夫がされており驚きと感動が多くありました」(学生 E)

「家の環境のよさです。子どもが使いたい時に使えるようにおもちゃを取りやすいところに置いてあったり、おもちゃの種類によって箱を変えていたりするのがとても参考になりました」(学生 H)

② 実習経験の意義

実習中に何気なく見たり聞いたりしたことが、母親に子育てでどのようにしたら良いかを尋ねられてふと思いつき起こされ役に立ったという内容であった。

「自分が今までしてきた経験をしっかりと実際の保育に活かしていくことの大切さと達成感、満足感を得たことが学びです。経験したことをそのままにしたり、忘れてしまったりするのは、とてももったいないと感じるようになりました。もう一度、実習日誌を読み返し、自分の中の引き出しを増やしていこうと思います」(学生 B)

③ 母親の愛情の深さと子育ての大変さ

いかに親が大切に我が子を育てているか。その一端に触れる思いであったという内容であった。

「子どもは愛される存在なんだということを学びました」(学生 J)

「普段お母さんは家のことをしているうえに幼稚園で使う子どものさまざまなものを作ったり、でもその最中でも子どもからは目を放せなくて本当に時間がないと思うし、いろいろなところに気を配って目を向けて、子育てということの大変さ、壮絶さを学ぶことができました。親子の絆、お互いを大切に思っている様子など、家庭でしか見ることでできないことをたくさん見ることができたと思います」(学生 K)

「普段入ることのできない家庭空間に入ることで、保育士としてどのようなサポートをしていけばよいのかを考えることができました。園では見られない子どもの姿や、保護者の心情にも目を向けていかなければならないと感じました。お母さんは怒っていても、その中に愛情があることも伝わり、保護者にとって大切な子どもたちを、私たちが大切に責任を持って保育していかなければならないと感じました」(学生 M)

家庭の中で子どもが大切に育てられている様子を直接目で見て肌で感じたことは、今まで以上に子どもと関わる経験を大切に思い、そしてこれから保育者になって出会う子どもとの関わりを大切に思う気持ちを新たにしようであった。

まとめ

本稿は、家庭訪問型子育て支援活動として始めたプロジェクトの初年度の記録を、保育学生の「今できる子育て支援とは何か」という観点からまとめたものである。プロジェクトは、保育学生を対象に、幼稚園や保育園での実習では体験できない子育て家庭の実際を体験し、自分たちのこれまでの経験や学んだ知識を家庭での育児に役立てることを目的として開始した。訪問記録を分析した結果、保育学生は子どもと楽しく遊んだり生活面での介助ができたりすることによって、母親に家庭内で「母子分離」の時間と空間を提供できるところに自分たちを役立てられると感じていることが分かった。また、子育ての悩みを聞いたり、実習中の体験をもとに解決策を共に考えたりするという経験もしていることが分かった。一方で、遊びに展開を持たせられないことや安全配慮の問題、子どもの振る舞いを注意できなかったことが反省点であった。このような経験からの学びは①子どもにとっての家庭環境の役割、②実習経験の意義、③母親の愛情の深さと子育ての大変さを考える機会になったことであった。そのことが来春に就職を控え、もうすぐ保育の現場で働く自分をイメージするときに、保護者が我が子を大切に思うように、自分も保育者として子どもとの関わりを大事にするという気づきにつながっていた。何より子どもと遊ぶことで家庭内の母子分離の機会をつくり、それが母親の育児の役

に立つことが示された。以上の結果から、保育学生の「今できる子育て支援」への一つの仮定（可能性）を導くことができた。この点を示唆したことが、本プロジェクトの意義といえるだろう。

しかしながら、本プロジェクトは始まったばかりで課題も山積している。まず、反省点で挙げられた「子どもの遊びの展開」という面では、今後、事前指導において担当児との遊びに多角的な見通しが抱けるようにする必要がある。その遊びの内容の変化を明らかにすることで、子どもの遊びへの理解を深めることができるだろう。これについては次年度以降の活動の課題としたい。また、今回の取り組みでは、母親からの聞き取りを行うことができなかった。保育学生の子育て支援への意識化が示唆された一方で、母親にとってどのようなメリット・デメリットがあったかは検討していない。さらに、このような取り組みは、日頃小さい子どもと関わる経験の少ない学生の親準備性の向上に役立つことにも役立つと考えられることから、保育者志望ではない学生にも参加を促すことが必要であろう。今後は活動の範囲を広げて継続的に取り組むことが期待される。

注

- 1) 親子遊びの広場として月に一度、大学の施設内の保育室を開放している（通称：にこにこクラブ、もしくは、保育室開放）。この広場の企画・運営も筆者のゼミ活動の一環である。開催時は、大学近隣在住の未就学児とその保護者が参加する。月ごとの参加者の平均は20組程度。
- 2) 親子遊びの広場で出会った親子もいるため学生と受け入れ家庭の親子は必ずしも初対面ではない。

引用文献

- 1) 平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育 保育要領<原本> (2017) チャイルド本社
- 2) 鯨岡峻 (2013) 子どもの心の育ちをエピソードで描く. ミネルヴァ書房.
- 3) 塚田みちる (2009) 乳幼児の自己調整の発達過程と親子関係の歴史—親の「こうしないで欲しい」を子どもが聞き入れるようになる過程—. 風間書房.
- 4) 文部科学省中央教育審議会 (2000) 少子化と教育について
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309769.htm
- 5) 川瀬隆千 (2009) 学生保育サポーター事業のプログラム評価. 宮崎公立大学人文学部紀要. 16(1) 45-62.
- 6) 小島康生・水野里恵・塚田みちる (2013) 家庭参入型の親子とのふれあい体験が大学生の親準備性にもたらす効果. 臨床発達心理実践研究. 8.73-79.